

協議会だより

## 道央技術士協議会

### —— 第14回道央技術士協議会を開催 ——

北海道技術士センター会員の皆様におかれましては、ご健勝でご活躍のこととお喜び申し上げます。

最近随分と大きな災害に見舞われ、地球環境の確かな変化を受け止めざるを得ません。

'03年8月の台風10号による日高地方の豪雨と洪水による災害、'04年8月北太平洋上に発生した台風18号は烈風台風となり日本全国各地に爪痕を残し、北海道では、4人死亡と1人不明の人的被害、神恵内の大森大橋の落橋等猛威をふるい、更には、'04年10月の新潟県中越地震による死者46人負傷者4,174人、'04年12月地震空白地帯と言われている留萌沖地震、直近では'05年3月の福岡県西方沖地震など地球環境の急激な変化を感じざるを得ません。防災対策としての常日頃からの確かな防災意識の涵養が望まれます。

さて、去る平成17年3月22日第14回道央技術士協議会を開催しました。当日の参加者は、センター事務局大谷 諭氏を含め14名で、前段の講演の後情報交換会に移り和気藹々の内に、次回の再会を期し、散会となった。以下に、平成16年度開催の見学会、講演会について報告いたします。

#### 1. 日鉄セメント(株)室蘭工場見学と講演

開催日：平成16年6月3日

##### 1) 日鉄セメント(株)室蘭工場見学

講師：武田部長他7名

環境問題に対し積極的に取り組んでいる企業として、BSE問題に象徴される肉骨粉処理、民生により発生する汚泥、古タイヤ処理施設の見学

講演内容：廃棄物の焼却処理に伴い発生する残渣利用更には排ガスによる二次公害から臭い対策まで高度技術に裏打ちされたゼロ・エミッションへの積極

的取り組みについて講演。企業マインドの高さが感じられた。

##### 2) 講演

講師：(株)橋梁メンテナンス（前本州四国連絡橋公団職員 JICA 専門家）金澤克義氏

演題：「建設技術と維持管理技術の移転について」

講演資料を基に現地技術者に対する技術移転に当たっての心得、生活事情などスエズ架橋こぼれ話やエジプトのピラミッドの話を織り交ぜて興味深く講演して頂いた。

参加人数：37人

#### 2. 厚幌ダム建設現場及び上幌内モイ遺跡発掘現場見学と講演

開催日：平成16年7月21日

##### 1) 厚真ダム建設現場見学

厚幌ダム建設事業の内 厚幌ダム建設付替道路6号橋上部工事を見学させて頂いた。本工事は、厚幌ダム建設に伴い水没する一般道道上幌内早来停車場線の付け替えの為に建設される橋梁上部工事で、橋長L=193.4M、総幅員W=9.7Mの3径間連続ポストテンション方式PCラーメン箱桁橋構造である。架設工法は、片持ち張り出し工法及び固定支保工式工法である。

当日は、室蘭土木現業所厚幌ダム建設事務所の田村所長他の方から作成して頂いた説明用資料を基に、洪水調節やかんがい用水等ダム事業の計画概要、ダム及び貯水池諸元、付替道路の概要、事業の進捗状況更には今回の対象見学工事であります6号橋の

概要について説明して頂いた。

現場では、事務所の担当技術者及び現場所長から架設機械設備等及び箱桁内を案内して頂き、誰にも理解しやすく説明して頂いた。

## 2) 上幌内モイ遺跡発掘現場見学

当該発掘現場では、厚幌ダム建設事業に伴い、厚真町教育委員会が平成14年度より遺跡の発掘調査を行っている。今回は、平成16年度中間成果報告資料を基に、担当学芸員の方から実際に掘り出された複雑な文様の擦文土器や登り窯で作られた須恵器、鉄製のやじりなど手に取り説明をして頂いた。中には、青森県五所川原産地の須恵器が見つかるなど、当時の広範囲な交流には驚きである。

## 3) 講演

講師：北王技研工業(株)代表取締役  
北海道建設部技術士会会長 須藤靖彦様

演題：少子高齢化社会を踏まえたこれからの町作りについて

最近16カ年の建設投資更には公共事業関係費の推移等のデータから公共事業の先細り、総人口の推移、出生率の低下（人口問題研究所）あるいは日本の将来都市圏図（平成14年度国土交通白書）などから、これからの社会資本整備のあり方について、問題点を整理され講演して頂いた。

参加人数 18人

## 3. 第14回道央技術士協議会 講演

開催日：平成17年3月22日

講師：海洋生物調査員 笹森琴絵様

演題：太平洋沿岸海域（噴火湾～釧路沖）での鯨類と環境について



フリーの海洋生物調査員として、噴火湾～釧路沖海域の鯨類を主に調査活動した成果について、講演をして頂いた。最近では、2005年2月厳冬期の知床シャチの生態行動に関し、チーム首席調査員として現地調査し、これらに関する得られた知見についてお話を頂いた。これまで我々は、鯨を経済活動の一環としてのみの対象（単なる食材）として扱ってきたが、鯨の観察を通じた自然との触れあい、発見と言う有形無形の自然遺産として大切にしていきたいと言うのが得られた結論です。

参加人数 14人

以上、簡単ではありますが報告とさせていただきます、最後になりますが、会員皆様の益々のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。

（文責：道央技術士協議会会長 小針 憲司）